京大人文研 90年の学知

危機の時代 生きる指針に

⑫ 座談会 人文学とは何か

1年にわたる連載の締めくくりとして、岡村秀典所長と新旧3人の副所長（稲葉穣、岡田暁生、小関隆の各氏）に、人文学とは何かをあらためて語り合ってもらった。新型コロナウイルスの感染拡大により、人間社会に及び寄る大きな変化を感じながらの座談会。「危機の時代にこそ、人文学が、生きる指針を示していかなければならない」と、熱を帯びた議論が展開された。（構成・阿部秀俊）

岡村秀典 氏

おかむら・ひでのり 1957年奈良市生まれ。東洋考古学。著書に「雲岡石窟の考古学―遊牧国家の巨石仏をさぐる」（臨川書店）。

稲葉穣 氏

（オンラインの遠隔会議システムで学外から参加した）

いなば・みのる 1961年新潟県生まれ。中央アジア史。編著に「Coins, Art and Chronology II（貨幣と美術と年代学Ⅱ）」（Austrian Academy of Sciences）。

岡田暁生 氏

おかだ・あけお 1960年京都市生まれ。西洋音楽史。著書に「西洋音楽史」（中公新書）など。

小関隆 氏

こせき・たかし 1960年東京都生まれ。イギリス・アイルランド近現代史。著書に「アイルランド革命1913－23 第一次世界大戦と二つの国家の誕生」（岩波書店）。

＝4氏撮影 船越正宏

岡村 人文研は「世界文化の総合的研究」を旗印に、非常に広い地域の、非常に長いスパンの文化を研究の対象にしている。異なる分野の専門家による「共同研究」というスタイルをいち早く生み出し、継承してきた。危機の時代、その強みを生かしていくことが求められる。

小関 人文研が掲げる「生きるための人文学」の内実が問われている。「不要不急」の行動自粛の流れで、研究会などは「念のためやめておこう」となりがち。人文研自体が「不要不急」とされかねない。

多くの人が生命の危機にさらされ、外出できないような時だからこそ、人文学のメッセージを届ける必要がある。藤原辰史さん（人文研准教授）が発表した「パンデミックを生きる指針」が注目を集めているが、こうした発信をみんなが本気で考えるべきだ。

岡田 発信と言えば、共同研究の班長を務めていただいている作曲家の三輪眞弘さんの言葉も印象的だった。学長をされている大学入学式の式辞で、こんなことを話している。

「物理学の世界において、『石』に『重さ』はあるけれど、『重い石』というものは意味の世界にしかない。数値化される重量とは別に、私にとって重いかという『感性』の領域がある」。そして、アートは「意味の世界」すなわち文化を切り開くものである、と。

これは人文学にも当てはまる。今私たちが陥っている危機は、科学的な領域を超えて、人間が作りだした側面もある。こうした問題に向き合う時、あえて過去に目を向け、かつて人間はどんな行動をしてしまったのか、過去の賢者はどう考えたのか、そうした歴史的参照点を示すことができるのが人文学だ。

稲葉 「人文社会科学」とひとくくりにされることも多いが、法学や経済学といった社会科学は政策研究を通じ、国家や共同体をよりよく導くための方策を研究する。これに対して、人文学は個々人の生き方に影響を与える。

岡村 社会科学が統合の学問であるとすれば、人文学は個性、多様性の研究である、と。

90年の歴史の起点になった東方文化学院京都研究所の時代から受け継がれた「人文研付属東アジア人文情報学研究センター」の中庭（京都市左京区）＝撮影 水沢圭介

稲葉 そして、社会にある普遍的な問題を個々人にひきつけて考えるので、アマチュア研究者が多く存在するのも特徴。これに対して専門家に求められるのは、世界をどのように読み、理解することができるのか、というモデルを提示することではないか。多くの人が、歴史や文学、哲学、究極的には自分の生き方を考えていく時に、その土壌を培う役割を担っている。

岡田 社会科学は、こうすれば状況が改善する、という処方箋を出す学問。でも人文学の成果は、受け取った人それぞれが咀嚼し、生き方や世界観を自ら考えてもらわないといけない。じわじわと効いてくる漢方薬みたいなところがある。そうなると、ますます「不要不急」と言われそうだけれど、世界観そのものの問い直しが必要な時なのだから、漢方的な体質改善が大事になる。

岡村 もうひとつ、人文学に風当たりが強い理由として、社会が推し進めようとしていることに対し、少し立ち止まって考えさせる性質があるからではないか。過去の時代あるいは世界の各地の文化研究から導き出される多様な見方や価値観は、宿命的に社会の流れに逆行する傾向にある。

岡田 まったくその通りで、人文学は、社会科学的な「統合の論理」から漏れてしまったことの方に注目する。路傍の花のようなものに注目しよう、という話だから。もっと生々しい言い方をすると、体制に対して、どこかで耳が痛かったり、うるさかったりする声を上げ続ける学問。

小関 不協和音のような。

岡田 そうです。稲葉さんは、何百年前の研究をしているのでしたか。

稲葉 1500年前の中央アジアです。

岡田 そうすると「浮世離れしてますね」などと言われがち。でも、そういう感想の背後には「1500年前の人の思想や営みは自分たちとは関係ない」という論理が働いてしまっている。

何かどうにもしようのないことが起きた時、人間というのは心のどこかで、どうしたら良いのか、この世にはもはやいない人たちに聞いてみたくなることはないですか。昔はどうだったの、と。死者も含め、自分と全然違う世界に生き、違う考え方をしている「他者」の声を聞き続ける。それは必然的に、統合の暴力に反旗を翻す学問になる。

個性と多様性 岡村氏

世界読むモデル提示 稲葉氏

稲葉 もちろん現実問題として、あらゆる人を個々に救った上で、全体も救うということは非常に難しく、論理矛盾を起こしてしまう場合もある。でも、無理なことを無理ではなくするために力を尽くすのは政治家の役割。私たちは、無理であろうが、あるべき姿や参照軸を提供し続けることが大切ではないか。

小関 危機が来ると、今はみんなで乗り越えよう、こういう時だから政府の足を引っ張ったりしないで、一致団結して進もう、となりやすい。そうすると、いよいよ異論が排除され、「不協和音」を出すやつは「非国民」とされかねない。

第2次世界大戦期に英国の首相だったチャーチルは演説の力で国民の士気を高めた、とよく指摘される。確かに彼の言葉の力には脱帽するが、ドイツに勝った直後の総選挙で歴史的な大敗をしたことも見逃せない。戦勝の立役者だったのに、平時の指導者としては認められなかった。戦争の前に戻ろうというビジョンしか示せないチャーチルに、英国人はノーを突きつけた。今、日本も苦境を乗り越えていくと同時に、新しい社会の在り方を考えねばならない。元の社会に戻そう、ではダメ。私たちは、「不協和音」を奏で続けて、強い指導を求めるだけでは危険であることを知らせるとともに、どこに向かうべきかという針路を示すことも必要になってくる。

歴史的な参照点示す 岡田氏

「不協和音」を奏でる 小関氏

岡田 過去の疫病、例えばヨーロッパ中世末期のペスト流行の時、人間がどう行動し、何より社会がどう変容したかを知ることは、ものすごく今アクチュアリティを持つのではないか。人間の根本的な行動パターンはそんなに変わるものではない。今こそ歴史研究が持つ「未来予測」の力を発揮してほしいと思う。

稲葉 ここ数十年で、人やモノの世界的な移動が飛躍的に増大しているのは間違いない。今回の新型コロナの世界的な流行は、拡張し続けてきたグローバリズムをどうするか、という問いを突きつけている。経済にしても政治、文化、学問の世界でも、交流が進み、関係が密になる。それぞれに功罪があり、どのつながりを大切にし、どこを変えるのか、慎重に考えていく必要がある。心配なのは、これが単に危機管理の問題として処理されてしまうこと。不具合ごとにパッチを当てて対処するのではなく、大きな社会の構想に基づいて考えることが求められる。

小関 19世紀のコレラの時には、公衆衛生が焦点化され、漂白された「清潔な」街を作ることに血道を上げた。大都市からスラムを排除し、クリーンな街を目指す。何を切り捨てるのか、切り捨ててしまっていいのか、注意が必要だ。

私たちの研究会なんて、狭いところに集まって口角泡を飛ばす「三つの密」のまさに典型、もちろん一時的に控える局面もあるが、リスクとして切り捨てさせてはいけない。

岡田 他者の声、多様性を大切にする人文学は確かに、目の前の感染者数の増大に対しては無力で、何の役にも立たない。むしろ渦中から身を引き離し、距離を置くことで物事を見つめ直そうとする。

不意に思い出したけれど、イラク戦争のさなかだった2005年春、古代シュメール文化が専門の前川和也先生が退官記念講演の最後に、こんな話をされていた。「今話した村は昨日、爆撃されました。このような研究をしていて、その村にどんな貢献ができるのかと言われたら、何の役にも立ちません。ただ3000年前の営みを知ることは、人間をちょっとだけ上品にするのではないでしょうか」。人文学とは何か、一つの答えのように思います。＝**おわり**

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます